

文部科学省立命館二十世紀のCOMプログラム 京都アート・エンターテインメント創成研究主催

「近世京都手工業生産プロジェクト」企画展

京都・西陣織「正絵」の知られざる芸術性

（織物図案の伝統・折衷・創作）

・日時 二〇〇六年一月二十六日（木）—二月一日（火）

九時三十分—十七時（入室は十六時三十分まで）

・場所 立命館大学 アートリサーチセンター2階・多目的ルーム

*入場無料

～今回の展示にあたって～

「正絵（しょうえ）」とは

「正絵」とは、織物製作にあたって図案家がデザインした織物図案のことである。織り上がりを想定して文様・文様配置・彩色は織物の原寸・原色を前提に、しかも綿密に描かれ、時には、より織り上がりの質感・雰囲気を追求して紙布に図案が描かれる場合もある。このように鑑賞用にも可能なほどの完成度と美しい仕上がりを誇る。

西陣織は京都で引き継がれてきた代表的な「伝統工芸」の1つである。金襴・唐織・綸子など帯地からや着物地まで多様に生産しており、「金銀の糸が使われた豪華な高級織物」というイメージを持つ人も多いはずである。しかし、その華やかな帯が、製糸から機織まで数十もの細かな分業の中で、各職人によって仕上げられていることを知る人は意外と少ない。そしてその多くの工程の中で一番最初に必要とされるのが「正絵」なのである。

「正絵」の芸術性

現在、21世紀COEプログラムである「近世京都手工業生産プロジェクト」の一つとして西陣織の図案である「正絵」のデジタル画像化を進行中である。

今回展示する西陣織「正絵」の多くは昭和初期から末期に制作されたもので、さまざまな時代・地域・素材から転用された意匠が含まれている。現代の「正絵」は明治以降、フランスから導入された織機であるジャガード機に対応して生み出された図案が発展して受け継がれたものである。その図案には日本における優れた文様や日本人が好む海外の文様が集約されていると言ってもよく、日本の装飾の歴史や様式を知る資料としては見過ごすことのできない存在である。

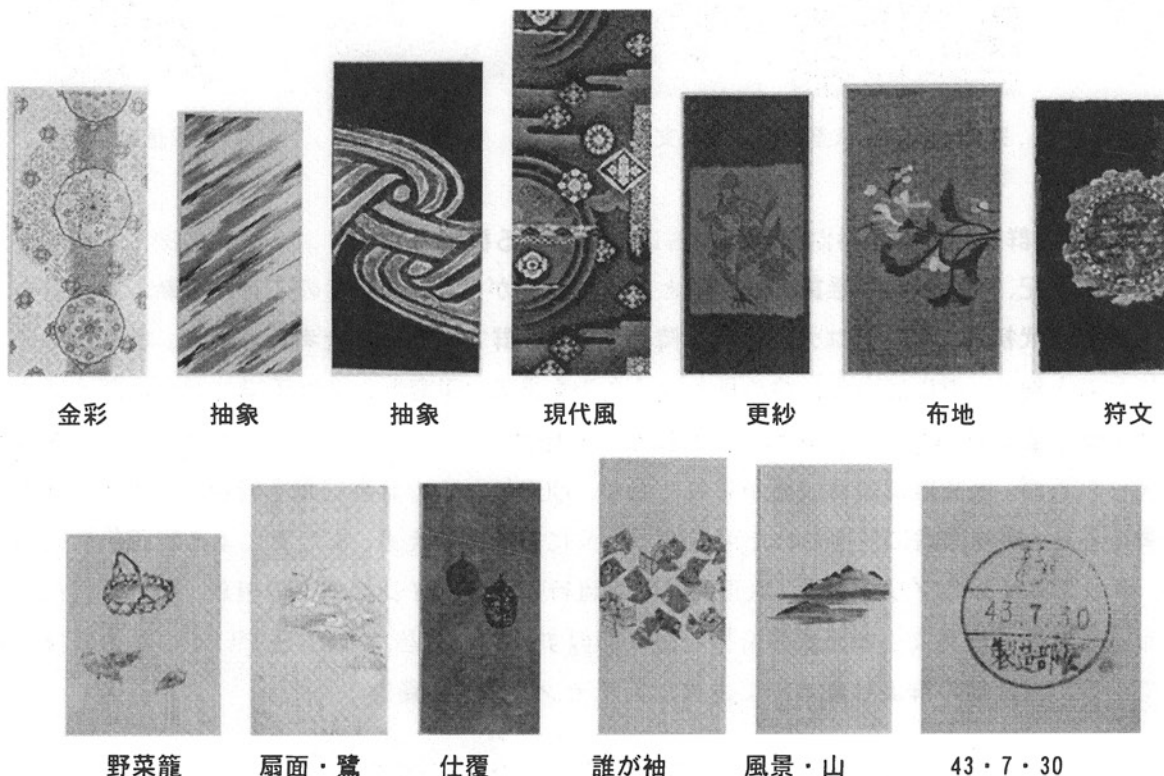
「正絵」の現状

「正絵」は各織屋で保管されるもので、本来門外不出である。しかし近年、呉服産業の斜陽化傾向の影響を受けて流出するものが増えており、当センターが収集した「正絵」についてもたまたま古書店で入手できたもので、現在2000枚近くになる。収集した「正絵」のような状態のものはごく一部にすぎず、それ以上に膨大な「正絵」が散逸している可能性が高い。絵画のように著作権がはっきりせず曖昧なこともあり、現段階において「正絵」の扱いはあくまで“下絵”である。しかも社会的認知度は低い。しかし、「正絵」の精密な描写と仕上がりは“下絵”の域を超えており、京都の伝統工芸品を知る一端として保存活用する価値は十分にある。また、これらの「正絵」には日本の古典柄だけではなく、抽象表現や更紗など創作文様や他の文化圏からの流入装飾も多く確認できる。「伝統工芸」と言われる西陣織の異なる一面を見るよい史料でもある。

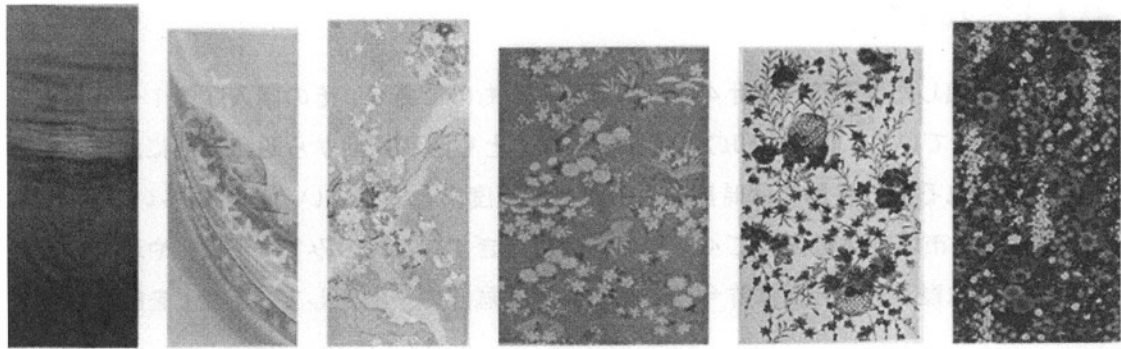
『正絵』について

当センターが収集した「正絵」は計4回の購入によるものであり、その購入順に1～4群と呼び、資料整理を行っている。記載や印の年代から少なくとも昭和初期から昭和末期にかけて製作されたものと思われるが、各群で同時期のものがある程度まとまっている部分も多い。しかし、これらの「正絵」は市場全体の内のごく一部のものに過ぎず、これのみで「正絵」や着物の時代傾向を判断するのは難しい。今回は昨今の着物における意匠の一例として「正絵」を紹介させていただく。

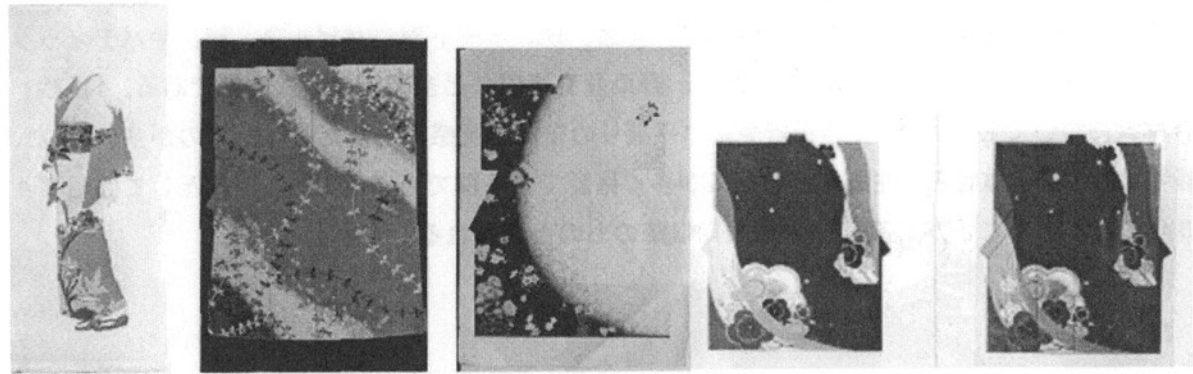
1群 図案の種類としては金彩、幾何学、抽象、現代アート風、パピルス、更紗やバティック風、かんざし・扇・器・仕覆などの器物、野菜籠や風景など多国籍な様式内容である。「正絵」の材質についても、しわの多い和紙や荒い平織りの布など質感にもこだわったものが多い。また、織物会社の印・作者名・住所などの記入が多く確認できる群でもある。制作年代としては昭和43年の印があることから高度経済成長期以降のものと思われる。



2群 一部1群に類似する傾向もあるため1群と同時期のものと思われるが、1群以上に現代の創作画系統の図が確認できる。彩色も他の群に比べて激しい色使いが目につく。その反面、友禅や紅型(びんがた)のような染文様、「御所解(ごしょとき)」要素を含んだ風景文様など日本の装飾様式に則った図も多く見かける。また形状としては紋図とセットの「正絵」や着付け後の想定図、店頭展示のように広げた着物の形態で図案を示したものも含まれている。



風景・薔薇と海 創作画 元禄・丸文 友禅・風景（船） 紅型 洋花

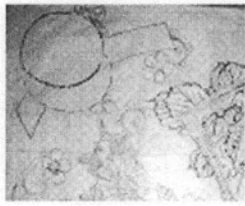


着付け図 完成想定図・八重葎 寛文風小袖 紋図 完成想定図

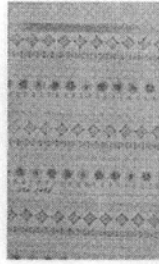
3群 4つの群の中では一番制作年代が古いと思われる群で「6. 7. 26」の印や、明らかに古い住所表記、また戦前の懸賞募集図案と思われる図が含まれる。このことから新しく見積もっても昭和時代初期、もしくは大正時代以降の「正絵」群ではないかと考えられる。状態は他の群に比べると悪く、中には虫食い跡の見られるものもある。図案としては手描友禅の図案や元禄様式の丸文や縁取りのされた大柄の植物文様などが確認できる。このことから染色図案の可能性も考えられるが、西陣織は表現技術が優れており、他素材からの装飾転用も容易に行える。その点を考えると、織物図案に使用された可能性も十分にあるといえる。また墨による絵画的表現の図案、テキスタイルのプリント柄、大正時代頃に流行したデザイン様式風の表現、江戸時代に登場する雛形本形式や寛文小袖様式の文様配置に類似するものなど、表現方法でいくつかの系統に分別できる。また他の群より全体的に古風なデザインの印象を受ける。



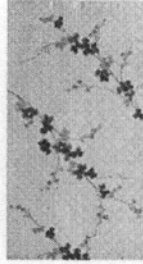
洋花 アール・ヌーボー 陰影 鯉 墨絵・外灯 墨絵・ペンペン草



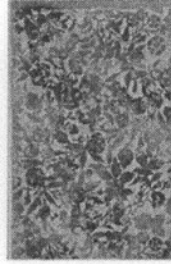
蹴鞠



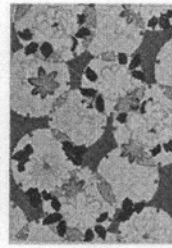
テキスタイル風



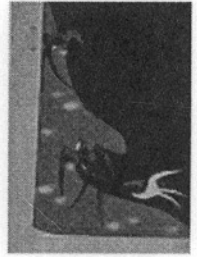
黄色い花



洋花



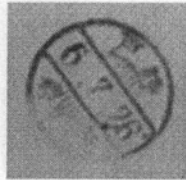
手描き友禅



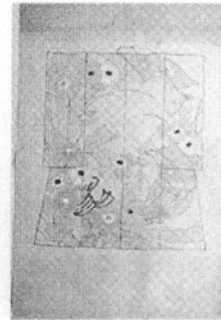
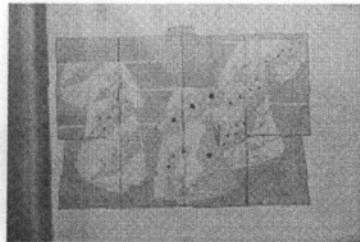
燕



「大典記念懸賞図案」6・7・26



ひいなかた・誰が袖



熨斗に菊



判じ絵・葵の上

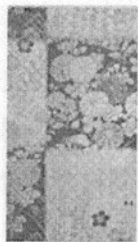
4群 唯一冊子になっている群で4つの群の中で最も見栄えがよく、濃厚に施された彩色と金・銀使いが目を引く。これらの「正絵」を購入した古書店の方によると、このような形態になったものはあまり見たことがないそうである。冊子の一部に「昭和四十五年」、「正絵」本体に「S57」から「S61」頃までの明記が多く登場することから昭和末期の作品を多く含んでいると思われる。また冊子には題名も記されているが、必ずしも内容と題名は一致しておらず、後に異なる様式の「正絵」が追加される中で一致しなくなった可能性がある。題名の例として「夏袋」「袋帯」「引箔」「賞状」「雑八寸」などがあり、「袋帯」「引箔」の名や濃厚な彩色から晴れ着の帯用の「正絵」であることが考えられる。意匠や装飾様式では「王朝」や「吉祥」を意識した意匠、また桃山時代の特徴を見せる花の刺繍や能衣裳を基にした意匠も多く、「日本」を意識させる表現の多い群である。しかしその一方で、レース柄や西洋の城モチーフなども紛れている。



桃山刺繍



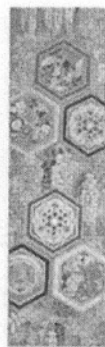
辻が花



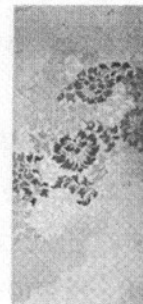
段替り (能装束)



能・牡丹



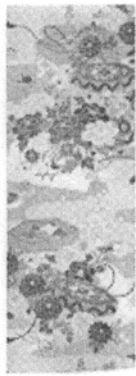
能・亀甲



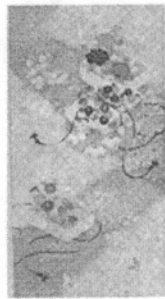
慶長小袖



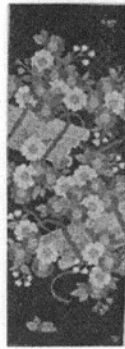
元禄丸文



貝桶



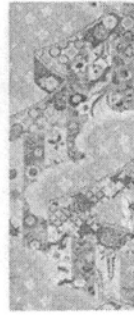
文箱



花筏



薬玉



幔幕



帆船



八稜鏡



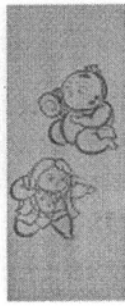
舞・胡蝶



光琳菊



琳派・料紙下絵



唐子



更紗



パルメット



西洋の城

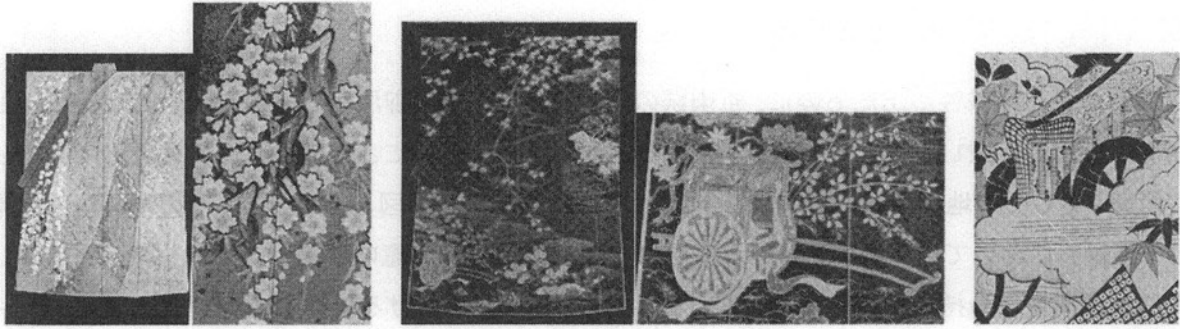
「王朝イメージ」と「御所車 (ごしょくるま)」

日本人の文化形成に大きく影響を与えた時代の文化として平安時代の都文化、いわゆる「王朝文化」が挙げられる。この文化イメージは室町時代にはすでに復古の意識が強まり、それ以降現在に至るまで、イメージの理想化を繰り返しながら自国文化の象徴として根付いている。

「御所車」はその王朝イメージを今でも象徴する「王朝文様」の1つである。その理由として、古くから『源氏物語』を案じさせる風景文様に使用されてきたことが挙げられ、現存する室町時代の蒔絵や茶釜にもみられる。江戸時代には『源氏物語』の「判じ絵」に題材で使用され、「御所車」に夕顔や扇を組み合わせて表す「夕顔」は有名な題材である。

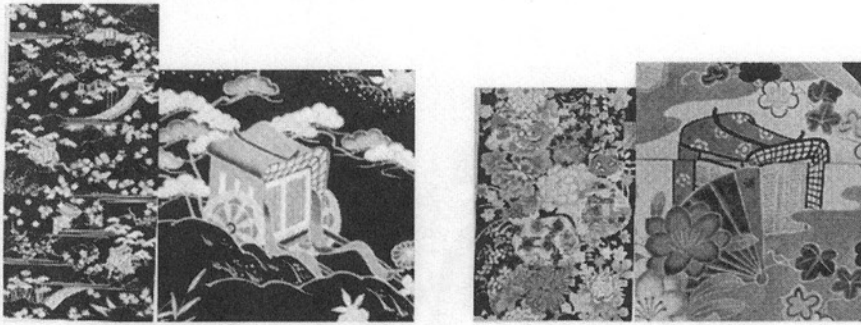
「御所車」の文様・意匠は展示の「正絵」にもみられ、2・3・4群で確認できる。

2群の御所車 「判じ絵」を基にした「御所解 (ごしょとき) 文様」という風景文様の中での使用が目立つ。ただ、本来「御所解」は古典・文学・謡曲などの題材を象徴的な器物や草花を紛れさせ、暗示的に示すのだが、2群の図の多くは明確な題材の判断がしにくく、テーマ性が薄れており、一部では表現・様相の形式化が感じられる。



左裾拡大

左裾拡大

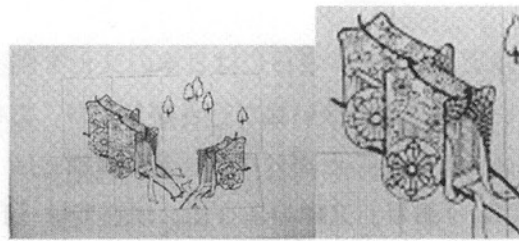


御所解

拡大

拡大

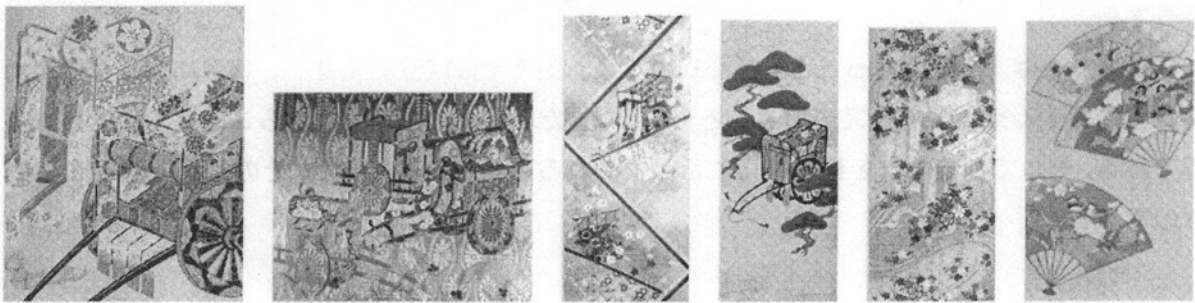
3群の御所車 数は少ないが、江戸時代のファッションブックに相当する雛形本形式の図が存在する。



雛形本形式

拡大

4群の御所車 「御所車」を始め、器物意匠の独立化傾向が強い。この群の「御所車」の特徴は一意匠が大きく、大胆な配置のものが多くことである。しかも金・銀箔が多用され豪華であり、「御所車」として独立した個性を感じる。中には『源氏物語』や謡曲を連想させる図もあるが、「御所解」のような付属意匠という印象は感じさせない。



銚（ほこ）と唐車（からくるま）

京都という地域性が出たものに、祇園祭の銚と葵祭の唐車（御所車的一种）を基にした「正絵」が挙げられる。これらは日本の伝統の象徴であると同時に京都にとって地元の文化象徴でもあり、「西陣」としての地域産品のブランドアピールの意味が強い図ともいえる。そのため銚や唐車の「正絵」においては「日本」という広義の文化象徴としての意味が強い「王朝文様」とは少し異なる意味合いも持っており、それが「銚」「唐車」図案における特殊な点といえる。



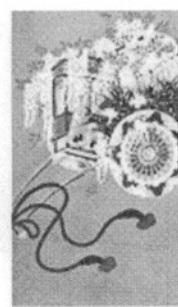
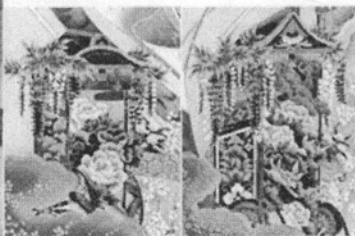
三大祭絵巻



祇園祭



現代風



葵祭



唐車

おわりに

現在、西陣織は伝統工芸品に指定され京都、さらには日本の文化を代表するものとして認識されている。この「伝統工芸」という肩書きについ目が行きがちだが、これらの「正絵」を見てみると、実は驚くほどの「折衷工芸」であることが分かる。では新様式は「日本の文様」ではないのかということそうではない。事実、「唐草」文様のように、現在では「日本的」なものとして定着している意匠の中にも、かつて大陸から渡ってきたものは多い。この他の物を貪欲に取り込む姿勢こそ日本の文化の特徴であり、一度吸収して新様式として還元された文様は紛れもなく「日本の文様」である。

現在の西陣織の図案の多彩さもまた、明治時代初期の近代化に向けた西洋技術や文化の流入の影響を受けており、その中でも当時の西陣は最新織機の輸入や新規図案の開拓にいち早く取り組んだ地域であった。そしてその決断があったからこそ、「伝統工芸」と呼ばれる現在の西陣織が存在する。

「伝統」とは「不変であること」、「形式の継承」だけでは成立し得ない。状況に応じた適応力や変化に対する柔軟性を備えていることも「伝統」たる要素であり、だからこそ長く生き残れるのである。そしてこの意味を最も適切に示してくれるのが西陣織であり、その図案である「正絵」なのである。

（谷野温子）